19世紀ポーランドの
工業都市ウッジにおけるユダヤ人

The Jews of Lodz in the Century Poland

藤　井　和　夫

The Jewish community in Lodz played an important role in the process of modernization of their industrial city until 1914. The Jews were trading products of the Lodz textile industry on an international scale and they invested their capital in further development of the city. They established and developed credit institutions. They also contributed to the advancement of educational and cultural life through their involvement in social activity.

Kazuo Fujii

JEL：N74
キーワード：ポーランド、ウッジ、ユダヤ人、経済的役割、社会活動、近代化
Keywords：Poland, Lodz, Jews, Role in the economic life, Social and Cultural Activity, Modernization

I　はじめに

一般に、一国の工業化と社会の近代化は並行して進む。ただその国、社会の特性によって、そのプロセスは独特の性格を持つことになる。筆者はかつて、19 世紀のポーランド社会の近代化に、その工業化の担い手がどのような役割を果たしたのかについて論じたことがある[1)]。注目されたのは、19 世紀ポーランド工業化の中核をなすウッジの繊維工業を担うドイツ人企業家が、ポーランド第 2 の都市に急成長するウッジが近代化していく中で行った社会事業であった。そこで明らかになったように、ドイツ人企業家たちはウッジに定着して事

1)　藤井和夫［2014］「19 世紀ポーランドにおけるドイツ人企業家の社会活動－ウッジ繊維企業家の事例－」、『関西学院大学　経済学論究』、第 68 巻第 3 号、2014 年 12 月

業を展開し、個人の生活を確立すると同時に、ポーランド近代経済社会の担い手となった。さらにドイツ人企業家だけではなく、ウッジを作り上げたポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人がそれぞれ、ウッジにこそビジネスチャンスがあるという共通の前提条件を持ち、ウッジを第二の故郷として、自分たちをポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人という以上に「ウッジ人」と表現するような市民として、ウッジの、ひいては 19 世紀ポーランドの近代社会形成の上で大きな役割を果たしたのであった。本稿はその問題をユダヤ人企業家[2] について考えてみようとするものである。

ところでポーランドでは、外国人企業家が社会の近代化の中で果たした役割について、特に社会主義時代に、無視ないしは過小評価される傾向があった。以前に見たドイツ人企業家についてそうであったが、実はユダヤ人企業家の場合にその傾向はさらに大きく深刻になる。たとえば、ウッジ繊維工業の発展にユダヤ人の大きな貢献があったはずなのに、まだその研究は不十分であり、1862 年から第 1 次大戦までの時期のウッジのユダヤ人についての専門研究がないために、われわれはこの民族の真の姿とウッジの歴史へのその影響をまだ知らずにいる、との指摘が 1998 年の段階でも存在する[3]。別のところで論じたように、ポーランドの歴史を振り返れば、この国は長期にわたってユダヤ人との共存と反目の関わりを重ねてきたことがわかる。そしてその関わりは他のどの国よりも密度の濃いものであり、ポーランド人に複雑な対ユダヤ人感情を植え付けてきた。その余韻は、国内からほとんどユダヤ人がいなくなってしまった今日もなお色濃い陰影を残しているのである[4]。ただ、現代のポーランドには状況の大きな変化も見ることができる。歴史研究の分野でも、ユダヤ人企業家の社会事業に関する比較的最近の研究の中で、著者の Badziak と Walicki は、かつてウッジのユダヤ人による社会事業・慈善事業の研究はほと

2) この民族の職業の特色として中小商人を含めて考える

3) W. Ziomek［1998］Udział przedsiębiorstw żydowskich w przemyśle włókienniczym Łodzi w latach 1860-1914w “*Acta universitatis lodziensis*” Folia Historica 63, Łódź, s.93

4) 藤井和夫［1998］「ポーランドにおけるユダヤ人問題の一局面－ 19 世紀ワルシャワの同化ユダヤ人を中心に－」、『関西学院大学　人権研究』、創刊号、1998 年 3 月、20 頁

んどないか、あっても付随的なものでしかなく、戦間期（戦前）は客観的な歴史分析には時期が近すぎるのと繊維工業の発展そのものの分析に関心があったし、社会主義時代には、このテーマは好まれず、当時のウッジ市に関する研究書でもこのテーマは全く無視されていた。1989 年以降に状況が変わり、Puś や Pytlas をはじめとする研究者による最近の業績によってユダヤ人の事業全体が分析され知られるようになったと総括している[5)]。本稿では、それらの新しい研究成果によりながら、ウッジの近代社会が形成されていく中でユダヤ人がどのようにそこに関与し、貢献していったのかを検討してみよう。

II　ウッジ繊維工業の発展と人口増加

まず、ウッジ市の発展をその人口の動きから確認しておこう。ポーランド王国による繊維工業区の設定前後から第 1 次大戦までのウッジの人口を示すのが第 1 表である。これは Puś が Janczak の研究[6)] をもとに整理したものであるが、数字に人口調査でしばしばウッジ市の人口に加えられていた市域外の郊外人口は含まれていない。したがって、一般によく引用される 1897 年のセンサスによる人口 31 万 4 千人や 1911 年の 51 万 2 千人、1913 年の 50 万 6 千人よりも少なくなっている。本稿で採用した同じく Puś による他の集計とは、第 2 表以下にみられるように市の人口総数に一部で相違が見られるが、ここではこの第 1 表の人口数が、残された史料からわかるウッジ市内の人口をもっとも網羅したものとみなして分析を進めたい。

工業区が設定された 1820 年代後半からウッジ市の人口は着実に増加し始め、1840 年代にしばらく停滞した後、1850 年代後半から再び増大し 19 世紀末にさらに急激な増加が見られる。20 年代に始まる人口増加は、王国政府の働きかけによって生じたドイツ方面からの繊維業者（主として中小の織物工）の来住によるものである[7)]。政府による財政的支援やウッジの繊維業の将来性へ

5) K.Badziak i J. Walicki［2002］*Żydowskie organizacje społeczne w Łodzi do 1939 r.*, Łódź, s.7

6) J.Janczak, *Ludność Łodzi przemysłowej 1820-1914*, Łódź, 1982

7) 藤井和夫［1989］『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展（1815-1914 年）－』、日本評論社、33-68 頁

第 1 表　ウッジ市の人口

1820 年	767 人	1844 年	18,558 人	1877 年	51,385 人	1896 年	181,801 人
1821	799	1845	17,305	1878	58,973	1897	197,107
1824	939	1847	15,073	1879	69,034	1898	255,000
1825	1,004	1849	17,567	1880	77,450	1899	269,357
1826	2,000	1850	15,565	1881	89,166	1900	283,206
1827	2,837	1851	18,190	1882	96,863	1901	294,864
1828	4,909	1852	24,116	1883	99,039	1902	307,570
1829	4,896	1853	21,488	1884	105,665	1903	320,486
1830	4,343	1854	23,481	1885	106,450	1904	328,586
1831	4,717	1855	33,285	1886	111,690	1905	343,944
1832	5,131	1857	39,110	1887	117,432	1906	329,056
1833	5,357	1864	40,319	1888	121,013	1907	328,383
1834	7,578	1865	40,121	1889	125,925	1908	341,416
1835	7,595	1867	40,695	1890	130,028	1909	393,526
1836	9,610	1868	43,194	1891	136,091	1910	408,442
1837	10,645	1869	44,167	1892	143,933	1911	423,727
1839	14,770	1871	47,659	1893	149,989	1912	441,096
1840	18,582	1873	48,941	1894	156,130	1913	459,353
1842	20,000	1875	49,501	1895	168,512	1914	477,862

出所：W. Puś, Zmiany liczebności i struktury narodowościowej ludności Łodzi do roku 1939, w M.Koter, M.Kulesza,W.Puś i S.Pytlas［2005］*Wpływ wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta*, Łódź, s.13

第 2 表　1897 年ウッジ市の民族別人口

宗教別人口

カトリック	151.7 千人	48.3 %
プロテスタント	56.5	18.0
ユダヤ教	98.7	31.4
ロシア正教その他	7.1	2.3
市総人口	314.0	100.0

民族別人口（母国語による）

ポーランド人	145.6 千人	46.4 %
ドイツ人	67.3	21.4 %
ユダヤ人	92.4	29.4 %
ロシア人その他	8.7	2.8 %
市総人口	314.0	100.0 %

出所：J.K.Janczak, Struktura narodowościowa Łodzi w latach 1820-1939, w W. Puś i S. Liszewski red.［1991］*Dzieje Żydów w Łodzi 1820-1944, Wybrane problemy*, Łódź, s.48

の期待から、それは大量の移住現象となって市人口の規模を拡大した。世紀半ばからは別の要因も加わって、一層ダイナミックな人口の増大が見られた。世紀後半の新しい要因とは、1）ポーランド王国とロシアにおける鉄道の発展、2）1850 年のポーランド王国のロシア関税圏編入と「金関税」として知られる 1877 年のロシアによる保護関税の設定、3）それらの結果として生まれたウッジ繊維製品に対する巨大なロシア市場、4）繊維工業における技術革新の進展、5）ポーランド王国内の国内市場を拡大し、かつ安価で大量の工場労働者を生み出すことになった 1864 年の農奴解放、6）ユダヤ人の居住制限を解除し、土地取引や公的な職業へのユダヤ人の参加を認めた 1862 年のいわゆるユダヤ人解放令、そして 7）ポーランド王国とりわけウッジにおける金融機関の設立である[8)]。それぞれの時期における人口増加の内実には異なった特徴があって、それは市人口の民族別分布に反映されていた。

ウッジ市の住人がどのような民族構成になっていたのかを見る場合、次のことに注意する必要がある。19 世紀の人口統計上、民族のカテゴリー分類は実は必ずしも統一されたものではなかった。19 世紀前半の人口調査では、宗教を基準にユダヤ人かキリスト教徒かという分類がなされるのがふつうであって、キリスト教徒の中のカトリック、プロテスタント、ロシア正教の分布がわからない場合もあった。1850 年代、60 年代にはスラブ系等の「出自民族」が大まかに問われ、明確に「民族」が直接調べられたのは 1921 年の調査からであった。他方で「宗教」による分類は 1897 年のセンサスと 1911 年、1918 年の地域での人口調査にも用いられた。ゆえに多くの時期で確認の取れるのは宗教別の人口の変化ということになる[9)]。

なお 1897 年のセンサスでは宗教別人口と併せて「母語」による調査も行わ

8) 藤井和夫［1989］『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展（1815-1914 年）－』、日本評論社、89-138 頁、W.Puś, Warunki i czynniki rozwoju Łodzi (1820-1939), w W. Puś i S.Liszewski red.［1991］*Dzieje żydów w Łodzi 1820-1944, Wybrane problemy*, Łódź, s.16 および W. Ziomek［1998］Udział przedsiębiorstw żydowskich w przemyśle włókienniczym Łodzi w latach 1860-1914w “*Acta universitatis lodziensis*” Folia Historica 63, Łódź, s.94

9) W.Puś, Zmiany liczebności i struktury narodowościowej ludności Łodzi do roku 1939, w M.Koter, M.Kulesza,W.Puś i S.Pytlas［2005］*Wpływ wielonarodowego*

れているので、その時の宗教別分類と母語による民族別人口の構成を比較してみると第 2 表のようになる。この表の中のロシア人その他の項には、駐留ロシア軍とその家族約 4500 人が含まれ、その他はチェコ人 593 人、ウクライナ人 376 人、フランス人 184 人そしてそれ以外に数十人から十数人規模の民族グループがいた。見られるように、市人口のほとんどを占めた 3 つの民族については、カトリックはポーランド人、プロテスタントはドイツ人、ユダヤ教はユダヤ人というように、言語と宗教の分布はほぼ一致している。例外は、たとえばカトリック教徒のうち 12800 人（8.4%）が母国語をドイツ語と答え、プロテスタントのうち 2900 人（5.2%）がポーランド語を母国語とし、ユダヤ教徒のうち 4100 人（4.1%）がポーランド語、1200 人（1.2%）がロシア語、1000 人（1.1%）がドイツ語をそれぞれ母国語としていた[10)]。所属民族とは異なる職業上の言語状況が反映されていたり、ウッジに住むドイツ人のポーランド化を反映しているものとみることができよう。しかし、この宗教別の構成比の動きを、ほぼ民族別人口構成を示すものと考えることができるので[11)]、それに基づいて、ユダヤ人の動向を中心にウッジの人口構成の変化の背景を考えてみよう。

第 3 表は宗教別人口を示したものである。ここではカトリックはポーランド人を、プロテスタントはドイツ人を、ユダヤ教はユダヤ人をそれぞれ示すも

dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta, Łódź, s.17 および J.K.Janczak, Struktura narodowościowa Łodzi w latach 1820-1939, w W. Puś i S. Liszewski red.［1991］*Dzieje Żydów w Łodzi 1820-1944, Wybrane problemy*, Łódź, s.43

10) J.K.Janczak, Struktura narodowosciowa Łodzi w latach 1820-1939, w W. Puś i S. Liszewski red.［1991］*Dzieje żydów w Łodzi 1820-1944, Wybrane problemy*, Łódź, s.43, 48-49 および J.K.Janczak, Struktura społeczna ludności Łodzi w latach 1820-1918, w P.Samuś red.［1998］*Polacy-niemcy-żydzi w Łodzi w XIX-XX w.*, Łódź, s.44-45

11) W.Puś, Zmiany liczebności i struktury narodowościowej ludności Łodzi do roku 1939, w M.Koter, M.Kulesza,W.Puś i S.Pytlas［2005］*Wpływ wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta*, Łódź, s.17 および J.K.Janczak, Struktura narodowościowa Łodzi w latach 1820-1939, w W. Puś i S. Liszewski red.［1991］*Dzieje Żydów w Łodzi 1820-1944*, *Wybrane problemy*, Łódź, s.42-43

のとみなして、民族別の人口増加の動きを見ていきたい。ポーランド王国政府がウッジを舞台にその工業化政策を考え始めた時、都市法を与えられて法制上は都市に属するとはいえ、実態としてのウッジは農業を主とする小さな村落でしかなかった。表にはないが 1820 年のその人口は 767 人で、うちカトリックが 496 人（65%）、プロテスタントが 12 人（2%）、ユダヤ人が 259 人（34%）を占めていた。その後 20 年代初めからすこしずつプロイセン領となっていた周辺のポズナニ地方から毛織物工がウッジにやって来たが、1825 年以前の毛織物工の流入はまだ 100 名ほどであった[12)]。ウッジの人口が他に例がないほど急激に増加し始めるのは、1820 年代後半に王国政府がウッジを当時の主産業である毛織物ではなく綿・麻織物中心に育成政策を展開し、それを受けてザクセンやプロイセンから大量の織物工がウッジに移住し始めてからであった。

第 3 表　ウッジ市の宗教別人口

	市総人口	カトリック		プロテスタント		ユダヤ教	
1828 年	4.4 千人	2.5 千人	56.8 %	1.4 千人	31.8 %	0.5 千人	11.4 %
1846	14.1	7.2	51.0	5.4	38.3	1.5	10.6
1850	15.6	6.8	43.6	6.8	43.6	2.0	12.8
1855	24.6	11.5	46.7	10.3	41.9	2.8	11.4
1864	33.5	13.1	39.1	13.9	41.5	6.5	19.4
1875	49.4	19.4	39.3	17.1	34.6	12.9	26.1
1885	106.3	40.7	38.3	40.7	38.3	24.9	23.4
1890	129.5	49.3	38.1	48.6	37.5	31.6	24.4
1895	166.0	70.8	42.6	52.2	31.4	43.0	25.9
1900	280.0	140.3	50.1	70.9	25.3	68.8	24.6
1905	336.7	164.6	48.9	88.4	26.2	83.7	24.9
1914	481.2	252.9	52.5	64.5	13.5	163.8	34.0

出所：W. Puś, Zmiany liczebności i struktury narodowościowej ludności Łodzi do roku 1939, w M.Koter, M.Kulesza, W.Puś i S.Pytlas［2005］*Wpływ wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta*, Łódź, s.20

12) W.Puś, Zmiany liczebnosci i struktury narodowosciowej ludnosci Łodzi do roku 1939, w M.Koter, M.Kulesza,W.Puś i S.Pytlas［2005］*Wplyw wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na wspólczesne oblicze miasta*, Łódź, s.19 および藤井和夫［1989］『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展（1815-1914 年）－』、日本評論社、51-52 頁

そのことは 1828 年には 1820 年と比べて市人口が 6 倍に増え、ドイツ人の割合が 1400 人、31.8%になっていることに示されている。その後もウッジ繊維工業の活況に惹かれるようにドイツ人の入植者は増え続け、不況から市の人口が停滞する 1840 年代もその増加傾向は続き、1850 年代、60 年代には市のポーランド人人口を凌駕するほどであった。

1850 年代後半から先にあげたような要因で繊維工業のさらなる発展が始まると、市の人口は再び着実に増加し始めて、1850 年から 5 年間で 2 倍に増えて 1855 年には 3 万人を超え、1860 年代半ばに 4 万人、1870 年代半ばに 5 万人、1880 年代にはさらに急速な人口増加を実現して、1880 年代半ばには 10 万人に達した。その間、ドイツ人の人口もますます増えていくが、70 年代以降、とくに市の人口が 20 万人、30 万人と一挙に拡大していく 90 年代に目立つのはポーランド人人口の急激な増加である。これは農奴解放以降に、それまでにも存在していた周辺農民の工業賃金労働者としての都市集中がこの時期極めて顕著になったことを示している。しかもウッジ市内に直接移住するだけでなく、ウッジに隣接した Widzew、Chojny や Bałty などの村落に大量のポーランド人農民が市内工場の労働者として集住してきていた[13)]。ドイツ人人口が絶対数では増加し続けているのに、市人口に占める割合が 50 年代の 4 割強から 90 年代後半に 3 割を切って、20 世紀初頭には市人口の 4 分の 1 にまで低下しているのはそのためである。

III　ユダヤ人のウッジへの移住

では、ユダヤ人の人口の変化にはどんな特徴がみられるであろうか。第 3 表では 19 世紀前半の民族別人口の動向はほとんど示されていないので、Puś によってそれ以前の時期からのユダヤ人人口と市の総人口中のその割合を示したのが第 4 表である（先に述べたようにこの表と第 1 表では市の総人口に微妙な差異が見られるが、今は無視しておく）。ユダヤ人の人口には、さきのドイツ人やポーランド人とは明らかに異なる変化が見られる。まず 1820 年代に

13) 藤井和夫［2009］「19 世紀ポーランドにおける工業労働者の形成－ウッジ繊維企業の労働者－」、『関西学院大学　経済学論究』、第 63 巻第 3 号、2009 年 12 月、749-750 頁

政府によるウッジ繊維工業区の設置が決まりドイツ人の来住が始まる前から、後述するウッジの状況の変化にユダヤ人も引き寄せられて市への流入は増大している。1793 年にウッジに 11 人しかいなかったユダヤ人は、1809 年には 10 倍近くに増え、1820 年には 25 倍の 260 人近くに増えている。その後も少しずつウッジのユダヤ人人口は増え続けて 1820 年代には市の人口の 3 分の 1 を占めるほどになっているが、その後は絶対数の増加にもかかわらず先のドイツ人程の急増は見られず、むしろ繊維工業の発展の程度と比べれば増勢は控えめなものであった。そのために、市人口の中の割合は 1840 年代、50 年代はむしろ停滞気味となっており、大量のユダヤ人のウッジ市への移住が見られたのは 1860 年代後半以降のことであった。

なぜ 18 世紀末のウッジにユダヤ人の数が少なかったのだろうか。その理由は、当時のウッジ周辺の経済状況、ポーランド社会がユダヤ人に対して持っていた姿勢そして政治情勢にあった。以前にも触れたように、ポーランドには中世以来多くのユダヤ人が住んでいて、主に商業に従事しながら一般にイディッシュ語を日常語としてシュテートル shtetl と呼ばれる特別な地区で生活して

第 4 表　ユダヤ人人口とウッジ市人口中の割合

1793 年	11 人	5.7 %	1845 年	1,457 人	10.0 %	1862 年	5,380 人	16.6 %
1808	58	13.4	1846	1,443	10.2	1863	5,633	16.9
1809	98	19.1	1847	1,424	10.1	1864	8,463	20.3
1820	259	33.8	1848	2,067	13.7	1870	10,000	20.9
1823	288	36.0	1849	2,060	13.7	1875	12,900	26.1
1825	342	24.0	1850	2,010	12.9	1880	14,400	24.2
1827	397	14.0	1851	2,323	12.8	1885	24,900	23.4
1828	448	10.4	1852	2,408	12.7	1890	31,600	24.3
1832	450	10.6	1853	2,425	11.3	1895	43,000	25.5
1833	512	9.8	1854	2.741	11.7	1897	92,400	29.4
1836	705	10.7	1855	2,775	11.3	1900	68,800	24.3
1839	772	9.0	1856	2,886	11.7	1905	83,700	24.3
1841	1,359	8.3	1857	3,050	11.6	1909	88,200	22.4
1842	1,439	8.6	1858	4,553	15.5	1911	167,048	32.6
1843	1,529	9.3	1860	4,597	15.4	1913	171,900	34.0
1844	1,411	9.7	1861	5,380	16.6	1914	162,500	32.5

出所：W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.26-27

いた。ポーランド領内のユダヤ人は伝統的に宗教上の自由と自治が認められ、ポーランドの近代化に向けた改革の成果のひとつである 1791 年の「五月三日の憲法」でも各民族の宗教上の自由が保障され、領域内に住むユダヤ人は国民と認められて身分的保証が与えられることがうたわれていた。しかし、現実には従来からユダヤ人は農業に従事することや、土地・不動産を持つこと、そして公務につくことを禁じられており、ユダヤ人のみに課される税まであって、19 世紀前半にユダヤ人に対して行われた部分的改革は、解放というよりもむしろ制限に力点が置かれていたといえる[14)]。ユダヤ人の自治権は、シュテートルすなわちユダヤ人共同体 gmina żydowska の範囲内でのみ認められており、それを離れてユダヤ人が暮らしていくのは事実上不可能であった。当時のウッジは Włocławek に住むクヤーヴィ地方の司教が所有する町で、市内にシュテートルは存在していなかった。司教領にもかかわらずウッジ市内のユダヤ人居住規制はなかったが、シュテートルがなく、毛織物生産が盛んになっていた周辺の都市と比べて特に産業のない当時のウッジは、ユダヤ人にとっては住みにくい土地だったのである[15)]。

所有者の司教の記録によれば、18 世紀の初めにウッジにユダヤ人がいたらしいが詳しいことはわかっていない。歴史的に確認できる最初のウッジのユダヤ人は、1775 年に市の醸造人として妻と住み着いた Joachim Zelkowicz であり（ただし 3 年後に娘ができた後、市を去っている）、その後 1781 年に初めてのウッジ生まれのユダヤ人 Aszer Grosman の息子 Samuel が生まれ、1791 年にウッジには Lutomiersk の Izrael の息子 Cwi Ordynans を含む 12 人のユダヤ人住民がいた[16)]。当時のウッジにはシュテートルはなかったから最初のユダヤ人たちは市の周辺の Stryków のシュテートルに属していたが、1782 年には Lutomiersk のシュテートル所属となり、当時毛織物生産の中心地としてウッジよりも大きかった Zgiesz のシュテートルに属する者もいた。威信や財

14) 藤井和夫［1998］「ポーランドにおけるユダヤ人問題の一局面－ 19 世紀ワルシャワの同化ユダヤ人を中心に－」、『関西学院大学　人権研究』、創刊号、1998 年 3 月、21-22 頁

15) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź, s.11

16) H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.11

政上の理由で新しいシュテートルはなかなか認められず、ウッジのシュテートルがいつできたかははっきりしないが、1806 年 6 月 1 日には存在したことが記録からわかっている[17)]。

ユダヤ人のウッジへの移住は、ウッジの政治的な状況の変化によって本格化する。ポーランドは 18 世紀の末に三国分割の結果独立が失われると、第 1 次大戦までの長い従属の 19 世紀を迎えることになる。当然のことながらウッジもまたこの民族の苦難と運命を共にすることになり、マゾフシェ地方の西のはずれに位置したウッジはウェンチィツァ郡とともに 1793 年の第 2 次ポーランド分割後はプロイセン領に属することになった。この地方を領有したプロイセンはさっそく人口調査を行い、それによって 1793 年のウッジには 191 人の市住人のうち手工業者として、皮なめし工と仕立て屋の 2 家族、計 11 人のユダヤ人がいたことがわかる。プロイセンはポーランド内の教会領を世俗化する方針を持っていたために司教領であったウッジも政府所有の都市に変更され、さらにプロイセン政府はユダヤ人に有利な態度をとって（法制上にとどまったとはいえ）1797 年にはユダヤ人をある程度キリスト教徒と平等にする規定を定め（Statut Generalny）、1802 年にはプロイセン領にユダヤ人居住規制 de non tolerandis ludoeis の廃止を宣言した。それはシュテートルの有無にかかわらずユダヤ人はどこにでも自由に住めるようになることを意味するから、恐らくそれ以降ウッジへのユダヤ人の移住が増えていったと思われるが、1809 年まで住人の調査が行われることはなかった[18)]。なお、1797 年にはプロイセン領に住むすべてのユダヤ人に初めて姓（名字）を持つことも定められている[19)]。

1806 年にプロイセンがナポレオンとの戦争に敗れると、ウッジはワルシャワを中心に成立したワルシャワ公国の領域に編入されることになり、再びポーランド領に戻る。ところがプロイセンとは異なり、公国はユダヤ人に対する規

17) H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.11-12

18) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.12-13 および H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.12-13

19) A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.10

制を元に戻してしまう。ユダヤ人は都市への移住と土地購入に関してまたもや制約を受けることになったのである。幸いプロイセン領時代から人口が増え始めていたウッジのユダヤ人（1793 年 11 人、1808 年 58 人、1809 人には 25 家族 98 人）は独立のシュテートルを設立できる規模に達しており、先に述べたように 1806 年にはその存在が認められ、1807 年にはリーダー szohet の Lewek Heber の名前が、そして 1809 年の人口調査ではシュテートルの 2 人のリーダー starszi kahalny として Mosz Fajtłowicz と Pinchas Zajdler の名が出てくるし、木造のシナゴーグも Dworska 通り（現 Wolworska 通り）に存在していた[20)]。公国時代のユダヤ人人口は少しずつ増えて王国時代の初めには市の人口の 3 分の 1 以上を占めるまでになっていた。

1815 年に三国分割のロシア領内にポーランド王国が成立すると、ウッジの政治的環境はまた変化する。ウッジが属することになったポーランド王国政府は、1820 年から政府所有の都市となっていたウッジを対象に工業化政策を開始するが、その施策はドイツ方面の繊維手工業者を対象にしたものであってユダヤ人には適用されなかった。逆に行政の上位の権限を握るロシア政府は 1822 年 5 月 7 日に総督布告を発し、市内にユダヤ人居住区域を定め、そこ以外にはわずかなユダヤ人しか住めないようにユダヤ人の居住規制を開始した。一方でザクセン等からやってくるドイツ人手工業者には手厚い保護を与えながら、ユダヤ人にはそのウッジ市定住を妨げる施策がとられたのである。1825 年 9 月 27 日の総督布告でユダヤ人は市の北部の限られた区域（Wolborska 通り、旧広場、Podrzeczna 通り以南）に住むことが義務付けられ、1827 年 7 月 1 日までの猶予期間にユダヤ人は許可地区以外に従来持っていた不動産を処分し、相部屋で住まざるを得ない人を含めて 342 人が狭い居住区に移り住んだ。ロシア政府は例外として、2 万ズウォティ以上の財産を持ち、ポーランド語、フランス語もしくはドイツ語の読み書きができ、7 歳以上の子どもを公立学校に通わせ、キリスト教徒と変わらぬ服装をするという条件を満たす 2 家族、お

20) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.13-14 および H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.12-15

よび工場（アルコール蒸留所以外）やレンガ造りの建物を建設できかつ先の 3 条件を満たす家族、あるいは専門職（自由業）やアルコールを除く卸売商のみに市内の各通りへの居住を許したが、この当時にそのような条件を満たすユダヤ人はほとんどいなかったし、市内に住むドイツ人の間にはユダヤ人との混住を望まない動きも存在した[21)]。

さらにシュテートルに関しても、ロシア政府は 1821 年 12 月 20 日にウッジのそれを廃止して宗教と財政的権限のみを持つ下位組織 Dozory Bóźnicze（祈祷所評議会）に組織変更させた。ウッジにシュテートルが復活するのはようやく 1918 年のことであった[22)]。従って 1918 年までユダヤ人共同体の指導者の役割は、この祈祷所評議会の役員が果たすこととなったが、それは主に大工場主、商人、金融家が担っていた。ウッジのユダヤ人の企業家たちが、ユダヤ人の社会にとって不可欠な共同体そのものを支えていたわけである。19 世紀 80 年代以降の同評議会役員の名をあげておくと、Izrael Poznański、Szaja Posenblatt、Adolf Dobranicki、Moszek Aron Wiener、Jakub Wojdysławski、Tobiasz Bialer、Ezra Szykier、Chaim A. Trunk、Icchak Szwarcman であった。一方 19 世紀 70 年代初めから 1912 年までの最も優れたラビは、大慈善家でウッジのキリスト教徒住人との協力関係を支持する Eliasz Chaim Majzel であった。シュテートルの完全な復活に先立って、祈祷所評議会に代わる Zarząd Gminy（ユダヤ人共同体理事会）が機能することによって、1905 年以降は事実上伝統的なユダヤ人共同体の活動が回復された。第 1 次大戦前後には、とりわけ 1899 年に設立されたウッジのユダヤ人慈善協会 Żydowskie Towarzystwo Dobroczynności を通じた活動が非常に活発となってユダヤ人共同体の役割を果たしていたが、ポーランドが独立を回復した 1918 年になってシュテートルはようやくその権限を完全に回復した[23)]。

21) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.14-18 および H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.16-18

22) H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.16-18

23) W. Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.22

それまでは手工業的な性格が強かったウッジの繊維工業で、1835 年にドイツ人企業家 Ludwik Geyer が蒸気機関を導入し、さらに 1842 年からはイギリスが蒸気力を使用する紡績機の輸出を認め始めた。ウッジ繊維工業の機械化が始まったのである[24)]。繊維工業の発展は一層の労働力を必要とし、1839-1841 年にポーランド人が居住する周辺村落のウッジ市への編入が続いた。それらの理由から、1825 年の 342 人から 1830 年頃 450 人、1840 年代前半には約 1500 人と増えていたユダヤ人人口も、同じく急増するポーランド人やそれ以上のドイツ人の増加には追い付かず、1840 年代前半には市人口中のその割合は 10%にも満たない状態となった。狭い居住区に制約されたことと、この段階ではユダヤ人の繊維工業への関与が後の時代ほど大きくはなかったことが、ドイツ人、ポーランド人と比べてユダヤ人の人口増加が抑えられた理由であった[25)]。

1851 年にポーランド王国が関税自主権を失ってロシアの関税境界内に組み込まれてしまうと、むしろ自由に無関税で繊維製品を国内扱いのロシアに輸出できるようになった。さらに 1853-1856 年にはクリミヤ戦争で輸入の道を閉ざされた全ロシア帝国で繊維品需要が増大した。これらの市場の変化は、ウッジの繊維工業に異常なほどの活況をもたらし、ウッジには職を求める人々が押し寄せた。市の人口は 1850 年の 1 万 5 千人から 50 年代半ばに倍増して 3 万人を超え、60 年代に入ると 4 万人を数えるまでに増加した。今回はドイツ人、ポーランド人に劣らず、1850 年の 2 千人から 1857 年 3 千人、1850 年代末に 4.5 千人とユダヤ人の人口増加も目立っていた。理由はこの時の繊維工業好況の直接の背景がロシアとの取引すなわちユダヤ人が主に携わる商業の活発化によるものであったことと、1850 年代からユダヤ人が手工業者、中小工場主あるいは労働者として次第に繊維生産に関与し始めたからであった[26)]。

---

24) ウッジ繊維工業の機械化の進展とそれによる未熟練労働者の雇用増加については藤井和夫［1989］『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展（1815-1914 年）－』、日本評論社、102-105 頁参照

25) H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.18-19

26) H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.19

ウッジ繊維工業の発展の中でユダヤ人の活動が次第に大きな役割を果たすようになると、そのことが逆にウッジ市に暮らすユダヤ人の社会生活に変化をもたらしていった。ユダヤ人の狭隘な居住区問題の解決もその一つである。1827 年 7 月 1 日に 342 人が住んでいたユダヤ人居住区は、ユダヤ人の出生率が非常に高かったために、1841 年までに満杯となった。その時、1359 人が 19 の木造家屋と 5 棟のレンガ造りの建物に住んでいた。居住区拡張の申請に対してロシア人官吏は文書で許可状を出すことは拒絶したが、ユダヤ人は口頭での改善の約束を得ることができた。それに基づいて居住区の拡張が始まる。まず、従来の居住区の北側すなわち Worborska 通り、Podrzeczna 通り、旧広場、Drewnowska 通り、Stodolniana 通り以北に居住区が拡張された。この拡張をロシア政府が公的に認めるのは 20 年後のことになるが、その時にはすでにこの居住区の人口は 4 倍近い 4982 人に増えていた。その後居住区は再び拡張が必要となり、今度は旧広場、Aleksandryjska 通り、Świętego Jakuba 通り、Jerozolimska 通り、Franciszukańska 通りの東側および Zgierska 通り、Kościelna 通りと Kościelny 広場に囲まれた地域、そして居住区の南の境界は Łódka 川に達した。結局、市の繊維工業の発展とともに、ユダヤ人の商業上の能力とコンタクトの広さが有用であることをウッジ市のドイツ人やポーランド人も、そしてロシア政府も認めるところとなったために、その居住規制は事実上自由化されていったのである。最終的にロシア政府は 1862 年 6 月 5 日、いわゆるユダヤ人解放令を発し、ウッジの社会、文化、経済のすべての面でユダヤ人の活躍が見られることとなった[27)]。

このユダヤ人に完全な公的権利を認めた 1862 年の布告以降ユダヤ人のウッジへの流入が急増した。第 1 表および第 3 表にみられるように 1864 年から 1914 年のウッジ市の人口増加は約 4 万人から 48 万人へと 12 倍に増えているが、一方ユダヤ人は 5380 人から 16 万 2500 人へと 30 倍以上に増加した。民族別の割合も 1862 年の 16.6%から上昇して 60 年代のうちに 20%を超え、1913

27) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.17-20 および H. Rogoziński, Pierwsi osadnicy żydowscy i ich życie do 1862 roku, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.20

年には市人口の 3 分の 1 以上の 34%に達している。1792-1821 年にウッジにやってくるユダヤ人の出身地はほとんど市から 50km 以内であっとの記録が残されているが、それ以降 1890 年代初めまでのユダヤ人流入はおもにポーランド王国領内からの移住であった。19 世紀末になると（特に 1892 年以降）、ロシアの西部諸県からのユダヤ人追放を命じた 1882 年の布告の影響でリトアニア人 litwak と呼ばれたユダヤ人が大量にポーランド王国のワルシャワやウッジに移住してきた。史料によれば 1914 年以前に 4 万人以上のリトアニアのユダヤ人が流入し、うち 1 万人以上がウッジに定住したと言われている[28)]。

IV　ウッジにおけるユダヤ人企業家の誕生：I.K. ポズナンスキ

次に、ウッジのユダヤ人が繊維工業の分野で企業家に育っていく具体的な姿を、代表的な繊維企業家である I.K. ポズナンスキ Izrael Kalmanowicz Poznański を例に見ておこう。カロル・シャイプラー Karol Scheibler、ルドゥヴィク・ガイエル Ludwik Geyer、ユリウシュ・ハインツェル Juliusz Heinzel やルドゥヴィク・グローマン Ludwik Grohman 等と並んでウッジを代表する繊維企業家の一人であるポズナンスキの一族はクヤーヴィ地方の出身であった。父 Kalman は、行商人 Izaak の息子として 1785 年に Włocławek 近くの Kowal で、母 Małka は Lubiń で生まれた。就業可能な職業の限られていた当時の一般のユダヤ人の例にもれず、Kalman は小規模な小売商（行商）を営んでいた。Kowal 在住中に夫妻には 5 人の子供ができている（さらに Izrael を含む 3 人の子供がのちに生まれる）[29)]。

時代は三国分割からワルシャワ公国、ポーランド王国と政治体制が大きく移り変わる激動期で、中小商人にとっては厳しい時期であったが、1815 年のポーランド王国の成立以後、その工業育成策や産業奨励策の影響でウッジ周辺の諸都市には繊維手工業を中心に活気が生まれようとしていた。そんな中、

28) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.19-25 および W. Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.21

29) M. Jaskulski, Historia rodu Poznańskich, w A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.10-11

Kalman は 1825 年にウッジの近郊にあって後にウッジ繊維工業地帯の一角を占めることになるアレクサンドゥルフ Aleksandrów に家族および 19 歳の作男と 12 歳の召使いとともに移つり住んだ。当時のアレクサンドゥルフは周辺の他の都市よりも人口の多い（1822 年当時でウッジよりも多い人口 3 千人）毛織物生産の中心地であり、拡大するユダヤ人居住地区も存在していた。Kalman はそこで行商人、リボン織工、羊毛染色工、商人など様々な職業につきながら 9 年間を過ごし、その間に Izrael を含む残り 2 人の息子が生まれた。しかし 1829 年から 34 年にかけて、新しい綿織物からの圧力もあってこの地方の毛織物生産が不況に陥り、一方でウッジの綿工業は活況を呈し始めていたため、いくらか豊かになっていたとはいえ 10 人の家族を抱える Kalman は 1834 年の初めにウッジへの移住を決意した[30)]。

1834 年 4 月 3 日に Kalman は、ウッジで繊維の小間物や香辛料を商う営業許可を得ることができた。最初はそれほど豊かではなかったらしいが、30 年代末には経済状況は改善し、1840 年には他の 6 人の商人とともに旧広場に面した土地を買いこの地区では初めてのレンガ造りの建物を建設できるほどになっていたし（その不動産の価値は 1200 ズウォティ）、年間の取引高は 4000 ズウォティに達した。1840 年代にその取引高を維持した Kalman は、世紀半ばになると仕事を手元に残っていた末息子 Izrael に譲ることを考え始めた[31)]。

Izrael Poznański は 1833 年アレクサンドゥルフで生まれている。兄たちが独立し、姉や妹が嫁いだ後は家に残って家庭内で父親や義理の兄 Tugendhold 博士の教育を受け、後者の勧めでウッジ旧市街区の小学校を終えた後、1847-1849 年には Nowe Miasto の広場にあった郡立のドイツ語・ロシア語実業学校 Szkoła Powiatowa Realna Niemiecko-Rosyjska を卒業している。彼の学歴は決して高いものではなかったが、この教育期間は Izrael にユダヤ人以外の人的ネットワークを与え、ポーランド語、ドイツ語、ロシア語を身につけさせた。これ

30) M. Jaskulski, Historia rodu Poznańskich, w A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.11-15

31) M. Jaskulski, Historia rodu Poznańskich, w A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.15

らのものは、やがて自身のビジネスにとって非常に有益なものとなったのである[32)]。また彼はワルシャワの有力なユダヤ人商人 Hertz 家の娘 Leona（1830 年生まれ）と 1851 年 3 月に結婚するが、それによって妻の資産として繊維製品を取り扱う商店とウッジの小さな織物マニュファクチュアを獲得したばかりでなく、ワルシャワ商人でかつ金融業者の Hertz 家とのつながりを獲得したのであった。結婚後妻はワルシャワに住みそこで最初の子供 Ignacy を生んでいるが、Izrael はウッジで 1852 年に父のすべてのビジネス（繊維製品の商店、レンガ造りの建物等の不動産、所有権を持つ 2150 ルーブルの価値の商品）を引き継いだ。その際、相続書類にも商店に残された Kalmanowicz という名称にも、家族としての継承性が強調されていた[33)]。

Izrael はウッジで父親から引き継いだ商店とワルシャワに妻が持つ商店の両方で商いを行ったほか、妻の資産であった織物マニュファクチュアで初めて繊維製品の生産に取り組んだ。その後、I.K.Poznański という名の商社を作り、ロシアの委託商人からの繊維製品の買い付けと商社自身による国産・輸入繊維製品の購入、それらの国内、ロシア西部諸州での販売を行った。彼はアメリカ南北戦争によるヨーロッパの綿花飢饉の際に、シャイプラーなどと同様原料綿花の入手と販売によって大きな利益を得たとも言われているが、いずれにしてもその商業活動は常に彼の経済活動の中で大きな役割を持ち続けており、1865 年に念願かなってウッジ商人組合 Zgromadzenie Kupców m. Łodzi に加入し、Dobranicki、Konstadt や Markusfeld と並んでウッジで最も裕福な商人の一人とみなされていた。一方 1850 年頃から始めたマニュファクチュアでの織物生産は 1859 年に 6000 ルーブルに達していたが、主に問屋制前貸 nakład の形態をとっていたのでまだ工場設備を必要としなかった。50 台の手織り機を 75 人の職人に貸し出し、年間 10 万メートル以上の綿・麻・羊毛の織物と

32) たとえば同じ学校に後に繊維企業家となるドイツ人の Karol Anstadt や Józef Gampe、Ludwik Peters なども学んでいた。W. Puś, Udział w życiu oświatowym i kulturalnym miasta, w M. Koter, M. Kulesza, W. Puś, S. Pytlas［2005］*Wpływ wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta*, Łódź, s.79

33) M. Jaskulski, Historia rodu Poznańskich, w A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.13, 15-18

5000 枚の綿スカーフを生産し、1861 年には 50 人の職人にさらに 18 人の雇用労働者を加えて、生産は 11 万メートルであったから、当時のウッジではこの手のタイプの有力企業の一つとなっていた。1859-1868 年の間に生産額はおよそ 4 倍の 23000 ルーブルに拡大したが、このマニュファクチュアは 1867 年頃ウッジ郊外の Zduńska Wola に移され、1870 年代の初めまで生産が続けられた[34)]。

Izrael は財産を築くにつれてユダヤ人居住区であった旧市街区を中心に多くの土地と建物を手に入れていくが、その中で 1862 年の農奴解放令によって農民が土地を売ることが可能になったのを受けて彼が購入した市北東部の旧農地の周辺を、Łódka 川があり水力を利用した工場建設に向くと Robert Biedermann や Karol Anstadt が購入するのを見て、自身はより西の Nowomiejska 通りの西側の土地を工場建設用に購入することにした。そしてついに 1871 年、イギリスの最新の機械織機 200 台と 216 馬力の蒸気機関を装備した自分の綿織物工場を Ogrodowa 通りに開設するに至る。工場開設資金の一部はワルシャワ融資銀行 Bank DyskontowyWarszawski から借りたが、その際には義理の父親 Mojzesz Hertz の口添えが大いに彼を助けたのであった。翌年に織機の台数は 2 倍、1875 年には 640 台となり、1874 年の雇用者数は親方と労働者を合わせて 294 人、生産額は 41 万 2000 ルーブルと工場は順調に拡大してウッジでシャイプラーに次ぐ巨大な綿紡績・織物コンビナートになっていった。そして 1889 年には 500 万ルーブルの資本を持つ株式会社『I.K.Poznański 綿製品株式会社』Towarzystwo Akcyjne Wyrobów Bawełnianych I. K. Poznański が生まれることになる。その企業の急速な発展の原因として、シャイプラーなどと同様にこの時代の中心的な工業製品である綿紡績・綿織物の分野で生産を行ったことのほか、シャイプラーなどより労働者の賃金を抑え、厳しいほど合理的な経営を行ったことが指摘されている。1870 年代の段階で利益率が資本

34) M. Jaskulski, Historia rodu Poznańskich, w A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.14-23 および L. Skrzydło［1999］*Rody fabrykanckie*, Łódź, s.53-55

の 35%という高い収益性がその後の発展をもたらしたのである[35)]。

V　ウッジにおけるユダヤ人の経済的、社会的な役割

ウッジの繊維工業に関して繰り返し確認すべきことは、その発展を担った人々が多民族的な構成を持っていたことである。ポーランド王国政府の工業育成策をきっかけとして移住してきたドイツ人や、世紀の後半になるほどその数を増やしたポーランド人移住者はもちろん、本稿で特に取り上げたユダヤ人たちもまたウッジ繊維工業の発展とその社会の近代化の不可欠の担い手であった。19 世紀半ば以降のウッジの人口増加の要因について先述した 7 つの要因、すなわち鉄道の発展、ロシアの保護関税、ロシア販売市場、技術革新、農奴解放、ユダヤ人解放令、金融機関のうち、最後の 2 つは特にユダヤ人に大きくかかわるものだったのである。

まず最後の金融機関について見ると、ウッジに金融機関が開設されるのは比較的遅く 1860 年代のことであるが、広く知られるように高利貸の形でのユダヤ人による信用供与はそれ以前から行われていた。1914 年にはウッジに 37 の銀行等の金融機関が存在していてポーランド王国全体の信用供与の 18%を占めていたが[36)]、商業・工業そしてインフラ建築を支えるそれらの金融機関の設立において、ユダヤ人が重要な役割を担ったのである。1872 年の商業銀行 Bank Handlowy や 1897 年の商人銀行 Bank Kupiecki の設立にはドイツ人工業家とともに、Ginsberg、Konstadt、Starkman、Jarociński、Goldfeder、Wulfson、Kernbaum、Neuman、Dobranicki その他のユダヤ人一族がかかわり、それ以外に彼ら自身の個人銀行 dom bankowy や信用組合 towarzystwo kredytowe を設立した。1914 年ウッジに存在した金融機関 37 のうち、22 の機関でユダヤ人は経営陣や監査役に加わり、しかもそのうち 11 の機関はユダヤ人のみの経営陣だったのである[37)]。

35) L. Skrzydło［1999］*Rody fabrykanckie*, Łódź, s.53-55 および M. Jaskulski, Historia rodu Poznańskich, w A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.21-30

36) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.50

37) W. Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.23

金融業以外に、ポズナンスキの例でも分かるように、ユダヤ人が主たる職業としていた商業の分野でも彼らの貢献は大きかった。19 世紀から第 1 次大戦にかけて繊維工業の発展にとって重要な意味を持った国内、国際商業は、彼らの活動に大きく依存していた。西欧からの原料や機械の輸入、ロシアへの織物輸出も主にユダヤ人企業によって組織された。ユダヤ人は輸送会社の 80%以上を所有し、国内外でウッジの織物を扱う商社の 74%以上を占めていたし、繊維製品の販売店や倉庫の 60%以上はユダヤ人の手にあった[38)]。

一方工業との直接の関係については、ユダヤ人は比較的遅れて工業生産分野に進出した。当初はドイツ人が工業もしくは手工業形態で行う毛織物・綿織物生産の傍らで行われた、主にユダヤ人商人による問屋制前貸の形態での織物生産であった。ウッジで最初のものはアウグストゥフ地区の Kalwaria の商人 Hersz Reinhertz が 1825 年にウッジで行った毛織物生産、次いで綿商人の Lejzer Berger が 1830 年に 34 人に前貸ししたものであった。1844 年にはウッジに 8 人いた前貸し商人のうち 7 人がユダヤ人であった。やがてマニュファクチュアもしくは工場形態で繊維生産を行うユダヤ人が現れた。その最初の例は 1846-47 年に 30 馬力の蒸気機関と 112 人（1847 年）の労働者を雇用する工場を創設した Kalisz の商人・前貸し商人 Dawid Lande であり、1849 年に 23 人、1862 年に 92 人を雇用したプウォツク郡 Drobina 出身の商人 Abram Mojżesz Prussak の羊毛紡績・織布工場であった[39)]。ポズナンスキの例で見られたような主に商業で得られたユダヤ資本の繊維工業への拡大は、19 世紀 60 年代に拡大し、第 1 次大戦まで続いた。

第 5 表はウッジ繊維工業中のユダヤ人企業の割合を示すものである。1869 年より前の時期については、ユダヤ人解放令以前の 1860-1862 年の工業家（fabrykant 手工業の独立親方を含む）と雇用者[40)] の人数がわかるが、1860 年の繊維業で fabrykant が 2508 人中ユダヤ人は 28 人（1.1%）、siły pomocnicze

38) W. Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.22-23

39) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.77-79

40) siły pomocnicze ただし作業場で働く独立親方も含む場合もある

第 5 表　ウッジ繊維工業におけるユダヤ人企業

	企業数		生産額(千ルーブル)		労働者数(人)	
	総計	ユダヤ人	総計	ユダヤ人	総計	ユダヤ人
1869	290	39 (13.4%)	5366	980 (16.4%)	5378	912 (16.9%)
1879	292	80 (27.4%)	27323	7413 (27.1%)	14457	3608 (24.9%)
1884	195	60 (30.8%)	51520	11005 (21.4%)	19235	5510 (28.6%)
1893	266	112 (42.1%)	58930	20504 (34.8%)	32201	12325 (38.3%)
1900	315	125 (39.7%)	104917	37002 (35.3%)	51816	18625 (35.9%)
1913	388	201 (51.8%)	232137	95687 (41.2%)	91536	36173 (39.5%)

出所：W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.82

は 5351 人中 230 人（4.3%）とその割合は非常に低かった。1862 年のユダヤ人の割合も、それぞれ 2.1%と 5.7%であり、若干増えているとはいえユダヤ人の繊維工業への関与はまだまだわずかなものだったのである[41)]。その後になると、第 5 表に見られるように 1869-1913 年のユダヤ人繊維工場数は 39 から 201 に増え、生産は 90 倍以上に、雇用者数は 36 倍に増えており、ウッジ繊維工業生産における割合も 16.4%から 41%以上に増大した。ウッジが繊維工業においてポーランド王国、さらにはロシア帝国の中で突出した地位を占めていたことから、1914 年のウッジのユダヤ人繊維企業の生産額で 41.2%、労働者数で 39.5%という割合は、ポーランド王国全体の中ではそれぞれほぼ 27%と 22%以上を占めていたことになる。かくてポーランド王国そしてロシア帝国中の最大の繊維工場の頂点に、ドイツ人企業と並んでウッジのユダヤ人による I.K.Poznański、Sz.Rosenblatt、M.Silberstein、M.A.Wiener、M.Kohn、J.Wojdysławski、Stiller i Bielschowsky の各株式会社、そして Jakub Hirszberg i Maks Wilczyński、Adam Osser、Henryk Hirszberg i Edward Birnbaum、Salomon Barciński 会社、Samuel Czamański、Borys Wachs の各企業の名があげられることになったのである[42)]。

41) W. Ziomek［1998］Udział przedsiębiorstw żydowskich w przemyśle włókienniczym Łodzi w latach 1860-1914w "*Acta universitatis lodziensis*" Folia Historica 63, Łódź, s.102 の tabela 1 により計算

42) W. Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.25-27

ところで、すでにふれたように、19 世紀前半のユダヤ人は住む場所を規制されただけではなく、土地の所有や取引を禁じられていたから不動産を所有するということは考えられなかった。しかし、ウッジの繊維工業発展につれて活発となったユダヤ人の経済活動は不動産取引にも反映していて、1864 年にユダヤ人の所有する建物や敷地はわずかに 10%強であったのに、1914 年にはその割合は 31%に増加していたのである[43)]。

最後に、ウッジの社会、文化生活の中におけるユダヤ人の貢献についても少し触れておこう。同時代人の眼には、ウッジの町は経済的な利益ばかりを目指す、文化不毛な街に見えることもあったが[44)]、実際は厳しい政治状況にもかかわらず、そこに住む人々自身の手でこの町の社会面、文化面での近代化が進められていた。特に世紀半ばまでに重要な役割を果たし始めていたドイツ人企業家の活動についてはすでに検討した[45)]。実はユダヤ人も、典型的な工業都市で住人の関心が経済問題に集中しがちなこの町の文化生活の組織化に大きな役割を果たしているのである。

たとえば、ウッジで最初の書店は 1848 年にユダヤ人 Jankiel Gutsztadt が開いている。さらに 1918 年まで書店と出版社の多くはユダヤ人が経営していた。これらの出版社はポーランド語、イディッシュ語、ヘブライ語、ドイツ語およびロシア語の本や雑誌を刊行した。もっとも有名なユダヤ人出版者には Moszek i Mendel Hamburscy、Saul Tewi Hochberg、Abram Baruch Kassman、Jeszajahu Uger、Lejzor Kahan および Leon Krukowski がいる。また、19 世紀と 20 世紀の境になるとウッジにはみごとな芸術世界が生まれたが、そこで重要な役割を果たしたのはユダヤ人の組織した芸術団体であった。ウッジ・ユダヤ人音楽・文学協会『Hazomir』łódzkie Żydowskie Towarzystwo Muzyczne i Literackie “Hazomir” とユダヤ人音楽・演劇協会『Harfa』Żydowskie Towarzystwo Muzyczno-Dramatyczne “Harfa” でコーラスや楽

43) W. Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.23-25

44) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.105-108

45) 藤井和夫［2014］「19 世紀ポーランドにおけるドイツ人企業家の社会活動－ウッジ繊維企業家の事例－」、『関西学院大学　経済学論究』、第 68 巻第 3 号、2014 年 12 月

団を作り、活発な公演や講演活動を行っていた[46)]。市民のための劇場については、まずドイツ人が 1880 年代に常設の劇場を建設し、ユダヤ人による劇場建設とその活動は 20 世紀初頭になってからであったが、1901 年に市の大劇場が開設するとその運営にあたるポーランド演劇協会 Polskie Towarzystwo Teatralne には有力なドイツ人企業家とともにユダヤ人企業家も会員となり、最初の会長にはドイツ人 Emil Geyer、そして副会長にユダヤ人の Maurycy Poznański が就任している[47)]。

教育の面では、ユダヤ人の初等教育を担ったのはユダヤ人のみが 4 歳もしくは 5 歳から 9 年間通う chedery（ユダヤ人小学校）という学校で、1861 年には 20 校あり、一部に宗教教育を含むそこでの教育のおかげでドイツ人やポーランド人よりもユダヤ人の識字率を高めていたが[48)]、この学校はもちろん国立ではなかった。ユダヤ人企業家のイニシアティブと財政支援のおかげで chedery を含めた宗教学校以外のユダヤ人の学校が発展したのである。19 世紀 60 年代から第 1 次大戦までにウッジには 12 の hedery および職業学校いわゆる “Talmud-Tora” があった。ユダヤ人の教育の発展に特に貢献したのは Konstadt 家や Jarociński 家の基金をはじめ、Poznański、Silberstein、Barciński、Wulfson、Rosenblatt 各一族からの財政支援であった。なおユダヤ人の最初のギムナジウムは 1912 年に著名なラビで説教者の Maks Braude のイニシアティブで設立されている。さらにユダヤ人たちは、ドイツ人やポーランド人と協力して 20 世紀の初めにポーランドの教育改革運動 inicjatywa oświatowa も支援している。またユダヤ人はポーランドの団体、とくに Towarzystwo Popierania Szkół Średnich “Uczelnia” および最初のポーランドのギムナジウムを設立した Towarzystwo Oświatowe im. E.Orzeszkowej のメンバーでもあった[49)]。

46) W. Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A. Machejek［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź, s.27-29

47) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.125

48) W. Puś［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź、s.143-145 および W. Puś, Udział w życiu oświatowym i kulturalnym miasta, w M. Koter, M. Kulesza, W. Puś, S. Pytlas［2005］*Wpływ wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta*, Łódź, s.79

49) Wieslaw Puś, Okres wielkiego rozwoju gospodarczego 1862-1914, w A.Machejek［2004］*Żydzi Lódzcy*, Łódź s.29-30

VI おわりに

18 世紀末から第 1 次大戦終了まで 123 年間にわたって他国によって分割され、支配されていたポーランドでは、その経済の発展も、社会の近代化も独特の色彩を帯びて進行することになった。その際、ウッジ市を作り上げたポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人が、それぞれ独自の活動を行いながらも、多面性を持つ相互作用を生み出していた。多面性の中には、民族的衝突や経済的ライバル関係も含まれるが、一方で独特の化学反応ともいえる共生関係も含まれていた。本稿で、ウッジのユダヤ人の経済活動を追う中でも、いくつかその共生関係を見ることができた。

19 世紀のポーランドにおけるユダヤ人は、生活面、経済活動の面でいろいろな制約を受け、差別された民族集団であった。その原因でもあり、結果でもある閉ざされた民族という側面を持つ。例にあげたポズナンスキ父子は、もちろん個人の判断と才覚を基礎にしながら、婚姻を含むユダヤ人独特の家族関係の中で財産を築いていく。しかし一方で特にウッジの企業家第 2 世代に当たる Izrael は、その教育過程で外部の広い世界との接点を持ち、ビジネスと社会活動においては民族を超えたつながりを生かしていっている。ウッジの企業家のもつ、一つの共通した性格であるのかもしれない。この共通したウッジ企業家のメンタリティについて、また一方で展開された彼らの間での厳しいビジネス競争の実態については今後の研究課題としたい。

企業家ポズナンスキに関しては、見てきたように商業活動と織物生産活動の両方を行っていたことが、1850 年代のポーランド王国のロシア関税への一体化やクリミヤ戦争によるロシア市場での需要増という新たな経済環境に対して非常に有利に作用することになったことを付け加えておきたい[50)]。いずれにしても、ユダヤ人はウッジ繊維工業製品の国際取引を組織し、続いてその資本をこの工業の発展に投じた。信用機関の設立と発展のほとんどは彼らに負っている。彼らはまた、ウッジの教育と文化生活でも重要な役割を果たした。ユダヤ人たちはそれぞれの能力を生かしながら事業を発展させ、またウッジの発展

50) M. Jaskulski, Historia rodu Poznańskich, w A. Machejek red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź, s.18-19

に重要な役割を果たしたのであった。

参考文献

Badziak, Kazimierz i Walicki, Jacek［2002］*Żydowskie organizacje społeczne w Łodzi do 1939 r.*, Łódź

Budziarek, Marek［2000］*Łodzianie*, Literatura, Łódź

Budziarek, Marek, Skrzydło,Leszek, Szukalak, Marek［2000］*Łódź nasze miasto*, Łódź

Friedman, Filip［1935］*Dzieje żydów w Łodzi, od początków osadnictwa żydów do roku 1863*, Łódź

Kempa, Andrzej i Szukalak, Marek［2001］*Żydzi dawnej Łodzi. Słownik biograficzny*, Tom I, Łódź

Kołodziejczyk, Ryszard red.［1993］*Image przedsiębiorcy gospodarczego w Polsce w XIX i XX wieku*, Warszawa

Koter, Marek, Kulesza,Mariusz, Puś, Wiesław, Pytlas, Stefan［2005］*Wpływ wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta*, Łódź

Machejek, Andrzej［2004］*Żydzi Łódzcy*, Łódź

Machejek, Andrzej, red.［2010］*Imperium Rodziny Poznańskich w Łodzi*, Łódź

Meller, Stefan, red.［1989］*Pamiętnik XIV Powszechnego Zjazdu Historyków Polskich*, Toruń

Michowicz, Waldemar. red.［1979］*Wczoraj, dzss i jutro Łodzi*, Łódź

Puś, Wiesław i Liszewski, Stanisław red.［1991］*Dzieje Żydów w Łodzi 1820-1944, Wybrane problemy*, Łódź

Puś, Wiesław［1998］*Żydzi w Łodzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź

Puś, Wiesław, red.［2004］*Studia z historii społeczno-gospodarczej XIX i XX wieku*, Tom II, Łódź

Pytlas, Stefan［1989］Społeczna i kulturalna aktywność burżuazji Królestwa Polskiego w Stefan Meller red., *Pamiętnik XIV Powszechnego Zjazdu Historyków Polskich*, Toruń

Pytlas, Stefan［1994］*Łódzka burżuazja przemysłowa w latach 1864-1914*, Łódź

Samuś, Paweł red.［1998］*Polacy-niemcy- żydzi w Łódzi w XIX-XX w.*, Łódź

Skrzydło, Leszek［1999］*Rody fabrykanckie*, Łódź

Ziomek, Wojciech［1998］Udział przedsiębiorstw żydowskich w przemyśle włókienniczym Łodzi w latach 1860-1914w “*Acta universitatis lodziensis*” Folia Historica 63, Łódź

中山昭吉・松川克彦編［2000］『ヨーロッパ史研究の新地平－ポーランドからのまなざし』、昭和堂

藤井和夫［1989］『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展（1815-1914 年）－』、日本評論社

藤井和夫［1998］「ポーランドにおけるユダヤ人問題の一局面－ 19 世紀ワルシャワの同化ユダヤ人を中心に－」、『関西学院大学　人権研究』、創刊号、1998 年 3 月

藤井和夫［2002］「19 世紀の工業都市ウッジにおける民族的共生－多民族社会ポーランドの一側面－」、『関西学院大学　人権研究』、第 2 号、2002 年 3 月

藤井和夫［2009］「19 世紀ポーランドにおける工業労働者の形成－ウッジ繊維企業の労働者－」、『関西学院大学　経済学論究』、第 63 巻第 3 号、2009 年 12 月

藤井和夫［2014］「19 世紀ポーランドにおけるドイツ人企業家の社会活動－ウッジ繊維企業家の事例－」、『関西学院大学　経済学論究』、第 68 巻第 3 号、2014 年 12 月